# 日本型雇用の限界を痛感

## 働く女子の運命

濱口　桂一郎著

私が大手出版社に入社したのは1991年。男性と同じ仕事をしているにもかかわらず、お茶くみやコピー取りなどいつまでも「女の子」扱いされ、20代後半になると「まだ結婚しないの？（辞めないの？）」と「肩たたき」にあったものだ。

あれから四半世紀。女性の社会進出は進み、4月には「女性活躍推進法」もスタートする。「働く女子」を取り巻く環境は、大きく変わった。だが「世界経済フォーラム」が発表した15年版の「ジェンダーギャップ指数」（社会進出における男女格差）で日本は101位と、先進国で群を抜く低さ。相変わらず女性からは「働きづらさ」を訴える声がやまない。いったい、なぜなのか。

本書はその答えを、働く女性の歴史やそれを取り巻く制度や社会環境、さらに国策との関係から導いていく。登場するのは、「富岡日記」「女工哀史」ら明治・大正時代の女性工員から、戦時中「労務動員」された女性、戦後登場した「BG（ビジネス・ガール）」や、それに取って代わった高度成長期のOLたちだ。

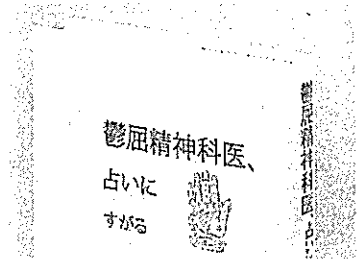
驚いたのは、結婚退職慣行だ。入社時に「誓約書」まで書かせる企業もあったそうで、未婚も当たり前の現在の20、30代女性が聞けば、私以上に憤るだろう。だが当時は「長期勤続の女性が男性より高給になる『不合理』を避けるため」という理由で、こんな慣行が公然と存在したらしい。

著者はそれを単に「けしからん」と非難するだけではない。企業や社会が彼女たちを、なぜそのように待遇したのかを、当時の訴訟の判決文も用いて、冷静に読み解く。

読了し、欧米型の男女平等政策を無理に当てはめてきた日本の雇用システムが、賞味期限を迎えたことを痛感した。いまや女性も、転職や再雇用が当たり前の時代。そろそろ新卒一括採用や年功序列賃金を改め、欧米のように「ジョブ（職務）型」の採用・育成社会に転換しないと、働く女子だけでなく男子も不幸になる、そう感じさせる一冊だ。（牛窪恵・マーケティングライター）

文春新書・842円／はまぐち・けいいちろう　1958年大阪府生まれ。労働政策研究・研修機構の主席統括研究員。著書に「日本の雇用と中高年」など

# 息子と

唐突だが、新興宗師とクラブのママ り、科学という粉を のがカウンセラーで と自虐的な自己定義 医である著者は母 後、カウンセリング を選んだ。それに少 をおぼえながら読み 本書の底流に流れる は母親との関係であ かされた。

近年母が「重い」 ちの関連書が、まる 箱が開いたかのよう れている。娘たちは れながらも母から逃 て距離をとって付き 望する。では息子た 残念ながら、日本で ら母との関係に取り 文学・映画は数少な 手映画監督の男性た 係を執拗に描いてい だ。その点で、息子 との関係を扱った っている。